

# 中国の教育改革について —— 体験的レポート

田 中 裕 巳

## はじめに

私は今春（3月21日から4月6日），東海地方教師学生第一次友好訪華団の一員として，中華人民共和国を訪れる機会をもった。中国におけるプロレタリア大革命以後の教育改革の進展は，日本の公教育の現実を鮮明に映し出す鏡として注目すべきものを持っているのではないかという予測のもとに，ここ数年，「中国の教育を学ぶ会」というささやかな研究会を，県内の小・中・高・大の教師たち（約20名）とともに続けてきた。この会を中心とした訪中計画は現実をみず，先の団への吸収という形での訪中の実現ではあったが，“中国の教育を学ぶ”姿勢で17日間の訪中を終えてきた。

他の訪中団と同様に，私の参加した団も，学校や少年宮などの教育施設の見学というよりもむしろ，工場や人民公社，労働者団地などの見学が中心であった。訪問した数校の幼稚園や中学校等では，授業参観・見学・座談会等を含めていずれも2～3時間という行程であり，言語の問題もあり，深くつっこんだ討論はできなかった。すべて団体行動である以上，個人的興味で1カ所に長く留まっているわけにも行かず，座談会でも，中国側の答えに，自明なくらいに公式的な答えが目立っても，深くつっこんだ質問もかなわず，結局は，あまりに時間が短かすぎたという他にない。したがって，このレポートは，私が訪問した幼稚園，小学校，中学校及び大学の事例を述べることによって，中国における文革以後（あるいは4人組打倒以後）の教育改革の一端を紹介し，私の印象を付記するにとどめたい。

## A. 幼稚園

上海市郊外の泗塘労働者新村幼稚園，鄭州市金水区実験幼稚園，石家庄市第一綿紡績工場附設幼稚園の3カ所を見学した。それぞれ園児が歓迎の歌や踊りを披露してくれたが，鄭州市の実験幼稚園で見学した体操の時間での「4人組殺せ」のリレーには，予測範囲内ではあったもののやはり度肝を抜かれた。

### 1. 上海市泗塘労働者新村幼稚園（3月22日午前）

この労働者新村は，上海市に約70カ所ある住宅団地の一つで，1958年に建設が開始され，現在人口は2

万7千人。ここに，中学2校，小学3校，幼稚園2校，託児所1カ所が設けられている。私の見学した幼稚園は，1960年に発足したもので，生後56日から3歳半までの乳幼児を対象とした託児所と3歳半から6歳までの幼児を対象とした幼稚園とからなり立っており，園児はあわせて350名，職員は35名である。カリキュラムは，読・書・算・絵画・体育・音楽などで構成され，「幼ない時から中国共産党，毛沢東，華国鋒主席を熱愛する心を養なう」ことをめざしているというのが，労働者新村革命委員会副主任陳氏の説明であった。

この園は，団地内の幼稚園であるためか，団地内の老人3人が私たちと同席して園児の出しものを目を細めて見ていたのが印象的であった。中国の労働者の停年は，男子60歳，女子50歳で，もとの給料の70%を保証され，ほとんどが息子や娘との同居ということであったから，孫の成長を目の前で見，孫たちに解放前の生活の様子を語り続けるのが彼らの生きがいなのである。団地の各棟には，向陽院という集会所があり，老人と子ども，老人同志，子ども同志の交流の場ともなっている。幼稚園もまたコミュニティー・センター的役割を果しているのではないかと思われた。また，この園では，「4人組から解放された喜びの歌」を聞いたが，「我愛北京天安門」と同じような素直な明るい響きを伴ない，それほど奇異な感じを受けることがなかったのも事実だ。

### 2. 鄭州市金水区実験幼稚園（3月26日午前）

この園でも，選ばれた50人位の園児たちが民族衣装をまとめて私たちを迎えてくれた。労働者新村の園の出迎えと異なっていたことは，男児が人民解放軍の衣装をまとっていたことと，朝鮮族，チベット族，ウイグル族などの少数民族の衣装をまとっている女児の数の比較的多かったことである。こんなことが，最初からこの幼稚園は，“実験”幼稚園とあるし，先進的な幼稚園ではないのかという先入観をますます強くした。

幼稚園の革命委員会主任の朱氏は次のような説明をしてくれた。

「1949年，開封で創立され，1955年，ここに移ってきました。プロ文革後は，鄭州市金水区実験幼稚園と称し，14クラス500人の園児が在学し，職員は80名です。1968年に革命委員会が成立し，主任，

副主任、委員、保教員がいます。保教員は、(1)思想、(2)文化・健康、(3)設備・器具管理の仕事を分担しています。」

「子どもたちの教育はプロレタリア階級の德育を第一の仕事とし、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を教え、小さい時から党と指導者を熱愛するようにさせています。即ち、公正無私、謙虚、規律を守り、労農兵に学ぶという精神を身につけるようにさせています。たとえば、50元を拾った張偉東という子どもは、ネコババをきめこまことに届け出ましたが、そういう精神も大切なことです。」

「労働者の定休日はまちまちですが、母親はいつも子どもを連れて帰ることができますし、両親が困難な事情にあるときは、幼稚園はしばらく子どもをあずかることもあります。」

費用は月14元（日本円で2,100円くらい）で、食費、病気の治療費、保育費に充てられています。工場から月4元の補助金をもらっている家庭も多いのです。」

以上のような説明を受けた後、(1)音楽遊戯、(2)電化教学、(3)体操、(4)積み木、(5)玩具遊び、(6)学工科、(7)屋外活動（綱引き、リレー）の順で見学をした。

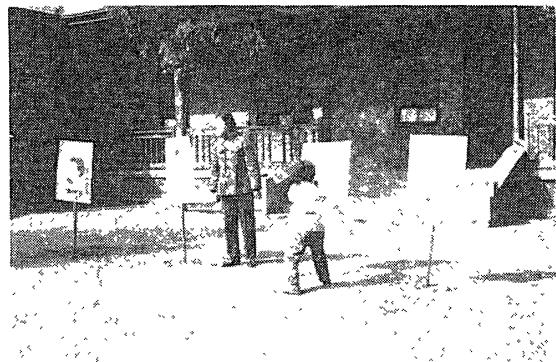
電化教学というのは、audio visual の意味で、大班（6歳児）のクラスでは、オーバー・ヘッドとテープレコーダーを用いたお話の時間であった。シートの絵は先生たちの共同製作によるものだそうで、オーバーヘッドのシートの交換は生徒にまかされていた。レコードの声にあわせて上手に交換していた。

体操は中班（4～5歳児）のクラスの見学であった。子どもたちは赤やピンクの紙でつくった花が真中につけられた白いゴムひもを両手に持ち、頭の上で両手を開いたり、腰の下で伸ばしたゴムひもをまたぐといった、可愛いらしい体操であった。

学工科は、大班のクラスの見学であったが、カバンの留め金に皮製の穴のあいたカバーを通すという単純な作業であった。38人の子どもたちが、小さな手で、真剣そのものに同じ作業に熱中している様は感動的でさえあった。労働と教育との結合は、社会主義教育的一大原則であり、小学校あたりから行なわれていると思っていたが、幼稚園でも、可能な範囲で原則を貫こうとしていることに感動した。学工科の見学は、また大班のクラスであったが、中班、小班（3歳児）でも行なわれているのかどうかは、あいにく聞くことが出来なかった。

綱引きは、前日、鄭州市第9中学でもみ、石家庄市拥軍小学校てもみることになるのだが、ずい分と盛んのようだ。どこでも、男子対女子の競技をしていたが、何か意味があるのだろうかと疑問を感じた。費用の安

さ、団結力の重要さがわかることが盛んならしめている理由なのだろうが、男女対抗の理由は分らない。3つの場所で見たことは、偶然の一致にすぎないかも知れないが……。



#### 『4人組殺せのリレー』

リレーというのは、「4人組」の似顔絵をバトン代りのおもちゃの銃で「殺せ！」といいながら撃つという競争遊戯であった（写真）。私達団員のほとんどが思わず、パチパチとカメラを向ける場面であった。たしかに度肝を抜かれはしたが、子どもたちの明るい顔、活発な動作の中に、『無知』というよりも『確信』を見いだせたのも事実である。日本にいるとき、あれほど独立思考とのかかわりで、幼稚園における政治教育に懐疑的であった自分が、中国の大地に立ち、中国の人民に接しているうちに、政治教育そのものに懐疑的であったのは、知と徳とを峻別しうるという仮定の上に立つ近代主義の陥穿にはまりこんでいたのではないのかと考え始めていた。これは『熱病』だろうか。

#### 3. 石家庄市第一綿紡績工場付設幼稚園（3月31日午後）

石家庄市は河北省の首都で、北部の山地を除いて、平地が多い。現在は紡績工業が盛んで、第一綿紡績工場はその代表的な工場である。

この工場の4,000人の労働者のうち、58%は女性である。すき綿、製紡、染色準備、機織り、仕上げの5つの車間（工場）の、耳をつんざくような騒音や蒸し暑さの中で、忙しそうに立ち働いている女工さん達の姿は、日本の紡績工場のそれと同様であった。

工場内には、福利施設として、家族寄宿舎、食堂、図書館、労働者クラブ、遊戯室、医务室、幼稚園、子弟学校（7歳以上高級中学まで）があり、いわば工場全体が1つの完結した社会であるように思えた。

幼稚園の見学前に保育所を見学したが、産休明け（56日、難産の場合は75日）から2歳未満の子どもをあずかる保育所には、勤務の終った母親たちが10人位子どもを迎えていた。30分の哺乳時間が1日に2回、

勤務時間内に保障されているそうで、どの母親の顔にも屈託のない笑いが浮かんでいた。遊戯室では、7, 8人の子どもに対して白い保育服を着た保母が4, 5人もついていて保育条件の素晴しさを物語っていた。

幼稚園は満2歳以上の子どもを対象とし、各教室、睡眠室（午睡だけでなく、夜も泊っていく子どももいる）を見学したあと、子どもたちの歌や踊りの出しものを見た。夕暮がせまっている中で、子どもたちは、元気に、民族舞踊や「4人組から解放された喜びの歌」などを演じてくれたが、踊りにしても歌にしても指導的な役割をする年長の子どもがいて、教師のひくオルガンの横で踊りや歌をリードしているのが印象に残った。子ども達の中に、いわゆるアクチーフを作って、子ども→子どもの教育的過程を重視しているようだ。出しものを終えた子どもたちは、薄暗くなった広い園庭のすみに10人ぐらいずつのクラスに分かれ、2, 3人の教師を交えてお話を時間に移っていた。

## B. 石家庄市拥軍小学校（4月1日午後）

この小学校は5年制で、学級数21、生徒数1,100名、教師37名である。教科は、国語、算術、音楽、常識、習字、体育、図画、政治の8科目、週当たりの授業時数は34~37時間。年間3~5週間の農村労働があり、学校内の印刷工場で働く、毎週2時間程度の「労働」の時間もある。次に掲げるのは、参観した1年生のクラスの黒板横に貼られていた時間割である。

		好好學習 天天向上					
		課程表					
		一年級一班 徐學級					
週期		一	二	三	四	五	六
上 午	1	算術	算術	算術	算術	算術	算術
	2	語文	政治	語文	語文	語文	語文
	3	語文	語文	唱歌	軍体	語文	唱歌
	4	軍体	自習	自習	自習	自習	図画
下 午	5	語文	労働	語文		政治	語文
	6	文体	労働	紅小兵		自習	班会

これによると、算術は6時間すべて第1限目、語文11時間、体育3時間（軍事体育が2時間、文芸体育

が1時間）、唱歌2時間、図画1時間、政治2時間、自習5時間、労働2時間、紅小兵活動1時間、班会（学級活動）1時間の計34時間である。軍事体育というのは、整列・行進などの練習や棒を使っての訓練、文芸体育というのはダンスや民族舞踊である。また、理科と社会科をあわせた常識科は、1年生にはないようだ。

教育方針については、革命委員会副主任の方氏が次のように語った。

「階級闘争を要とし、階級闘争を主たる授業として教師と生徒の自覚を高めることが方針です。労働者宣伝隊は上部構造に登場し、プロレタリアート教師隊列を養成しています。即ち、マルクス・エンゲルス・レーニンを学習させ、三大革命の中心人物になるよう彼等を改造しています。今では、97名の労働者・農民の兵士の兼職教師が養成されました。

古い教え方や試験制度も改革され、門を開いた学校をつくること（開門弁学）を堅持しています。知育・德育・体育により、プロレタリア革命のあとつきを養成するため、生徒の思想改造を重点としています。

教育と生産労働との結合を堅持するために、印刷工場を経営しています。その他、農村、工場、部隊とも連絡をとり生産労働に参加し、学校がプロ独裁の道具となるよう努力しています。」

見学したのは4つの教室と印刷工場であった。

〔算数〕 3年生の算数の授業。5ケタ÷3ケタの計算を行っていた。「紅旗中学校の同学416人が43,264本の木を林に植樹するには1人何本の木を植樹しなければならないか」という応用問題であった。問題の出され方が、かなり実用的であることは言をまたないが、印象的だったのは生徒たちの挙手の仕方で、全員ひじを机につけたまま左手を直立させていたこと。外国人の参観者がいるということで普段とはもちろん様子が違うのだろうが、挙手の動作一つとっても、乱れが少しもないことに驚嘆した。

〔国語〕 1年生の国語の授業。「算数の問題をやっている時、困難に出会い、教師に……」というような文中の、数(shù)、困(kuén)、教(jiāo)といった新出の字の書き方と発音の両方の練習。

〔書道〕 「中日両国人民要世世代友好下去」を1字ずつ練習していた。

〔工業〕 2年生のクラスでは、図画帳（1冊20枚）の枚数を数える作業を行っていた。また、5年生のクラスでは同じ図画帳に表紙をつけノリづけする作業をしていた。（次頁写真）

〔印刷工場〕 足踏み式の印刷機で図画帳の表紙、配給切符の印刷をしている生徒のグループ、裁断機（2人1組のかなり大きなもの）で紙を切っているグルー



《图画帳をつくる小学生》

、『工業』の教室で製品化されてきた图画帳、配給切符を紙でたばね梱包しているグループ等があった。5年生位のどの子供たちの顔も、それぞれの仕事に最大の注意を払って眞面目にとりくんでいる様子があふれていた。

各教室の授業・作業の見学のあと、1時間あまり質疑応答が行なわれたが、そこで次のようなことが明らかになった。

〔学校革命委員会の構成〕 幹部2名、教師2名の計4人の委員で構成されており、民主集中制と三結合による行政指導を行っている。また労働者宣伝隊が校内に常駐していて、政治的指導の役割を果している。教師37名のうち、共産党員は9名である。

〔紅小兵組織〕 全生徒の70%が紅小兵で、高学年ほど比率は高くなる。本人が申し込み、隊によって認められれば加入でき、紅小兵は、まじめにマルクス・レーニン主義を學習し、小さい時から党を熱愛し、労農兵に学び、祖国を愛することをめざしている。非行などの過ちを犯しても除名処分はせず、思想教育を行っている。

〔障害児教育〕 この学校には身障者のクラスはない。しかし、特別な配慮を用いる生徒はこの学校にも少数おり先生や生徒が世話をしている（残念ながらどのような障害をもった子供なのかまでは聞いただせなかつた）。聾啞学校は石家庄地区に1カ所ある。

〔先生の給料〕 最高73元、最低31元、平均45元。全般的に低賃金であるが、福祉がゆきとどくようになり幸福な生活を送っている。

### C. 鄭州市第9中学校（3月25日午後）

この学校は1953年の設立で初級中学と高級中学とを一貫した5年制中学校である。現在30学級1,700人の生徒、教職員130人という、かなり大規模な中学である。プロ文革後、大きく変貌し、教育と生産労働の結合を重視し、毛主席の5・7指示に従い工業・農業・

軍事などの教育を行っている。学校経営の小型工場があり、農村地帯には分校もあり、100人余りの兼任教師がいる。学校外の工場や人民公社に出て行って労働に参加する事もある。

学校革命委員会主任の郭先生から以上の概略の説明を受けてから、次の授業参観及び見学を行った。

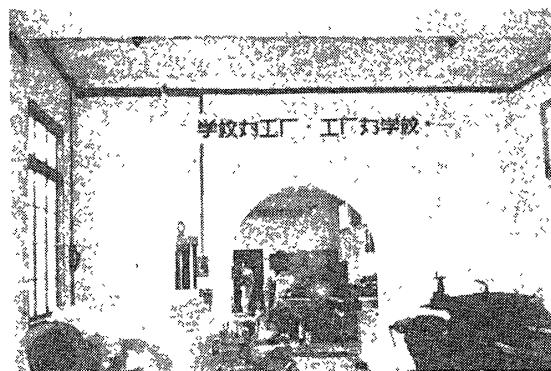
〔3年生の国語〕 毛沢東の「湖南農民運動考察報告」（1927年3月）を教材とした授業。

〔2年生の数学〕 3角関数  $\sin \alpha = \cos(90^\circ - A)$ ,  $\cos \alpha = \sin(90^\circ - A)$  の練習。

〔2年生の物理〕 テスターを使った電流実験

〔1年生の英語〕 Learn from Comrade Lei Feng. 命令文の練習。

〔3年生、4年生の化学〕



《学校工場のスローガン》

〔工場見学〕 “学校は工場の為に、工場は学校の為に”というスローガンのはられた附属工場（写真）は、硫酸、酒石酸などの試剤工場と金属加工工場とに分かれていた。昨年度の総収入は54万元、今年度は136万元を生産目標にしているということで、かなり大規模な工場であることがわかる。工場の収入によって、教科書、教材費、学費を無料とし、さらに労働保険費や教職員の賃金、労働者の福祉にも役立てている。

〔農場見学〕 50名くらいの男女生徒が、野菜畠で集団作業をしていたほか、豚舎では数人の男生徒が堆肥の堀り出し作業をやっていた。

〔軍事体育〕 クラス単位の体育の時間らしく、前に立った女生徒の号令で（男女共に）1mあまりの棒を水平につき出したり、頭上で水平に持ったりという動作をくり返していた。

〔放課後の全校体操〕 放課のベルとともに、全校生徒が校庭に男女別に整列。レコードにあわせて体操をしていたが、労働に従事していた生徒たちは来なかつたようだ。

〔野外活動〕

美術……「向雷锋同志學習」と書かれた黒板の前に立

ったモデルの少年を、40人くらいの美術部の生徒達がデッサン中。できるだけ写真に撮ったように似せて描くことが、評価の規準だそうだ。

模型飛行機……これはあそびにすぎなかったのかもしれないが、女生徒が5、6人共同で作ったと思われるエンジンつきの模型飛行機を校庭で飛ばして遊んでいた。遠まきに見ている生徒が100人近くもいたろうか。なかなかの人気。

質疑応答の時間には、鄭州第9中学の教員・生徒と私達の間で次のようなやりとりがなされた。

(1) 「プロ文革後、開門弁学は定着しているのに、何故実験中というのか?」—— 古い学校における教学内容・方針の特徴は、三遊離、つまり労働大衆からの遊離、生産労働からの遊離、プロレタリアートの政治からの遊離でした。そして、本と教室と教師の囚人でした。理論を丸暗記させる結果、エンジニアが設計したトラクターが後に走るという例も生じた。

教育は生産労働と結びつきプロレタリアートに奉仕するということを方針とすべきである。社会主義建設には時間がかかるのである。教育制度改革の具体的措置として、学生を工場、人民公社に行かせて学習させている。(国語教師 王先生の答え)

(2) 「德育、知育、体育の時間配当はどうなっているのか?」—— 時間の上での答えは難しい。德育は、政治科目的教育であるが、政治科目は他の科目を統帥する魂である。政治科目は授業時間の一割を占めている。体育の授業が大事なのは、体を鍛えるのは祖国を守るということを教えるためであり、厳しい規律性と組織性を身につけることが必要と教えている。

毛主席の教えに従い、我々は政治運動に参加せねばならず、四人組を批判、摘発する過程で、自己の思想改造をする。労・農・兵に学び、毛主席の路線を継承発展させていくことがもっとも大事なことである。軍事訓練は、一学期に一週間で、解放軍とともにする。(体育の先生の答え)

(3) 「学校運営の実態、教師の位置・役割について」—— 封建社会では教師は自由業であり、利益集団としての教師連合があった。新中国では、教師は党的教育幹部であり、学生のみちびき手であるから、教師を中心とする言い方はない。

学校革命委員会の組織はプロ文革中に登場したものであり、共産党の指導の下、集団指導、民主集中を基礎とした指導をしている。革命委員会は老・中・青の三結合であり、労働者、教師の代表、党委員会の三者から構成されている。学生にも自己の意見を出す権利があり、学校の指導に参加することができる。正しい意見を出した時は、指導グループはそれ

を実行しなければならず、意見を提出しても聞き入れられない時には、大字報を張り出す権利を持っている。

(4) 「学校と家庭との連絡はどのように行われているか?」—— 教師は不定期に家庭訪問をして、学生の成果を父兄に報告する。また父兄もときどき学校の招きに応じて学校訪問をする。父兄会というものもあるし、連絡帳もある。夏休みや冬休みには、学生の居住する地域の革命委員会や向陽院と連絡をとり、学生が休み中、工業に学んだり農業に学んで有意義に過ごせるようにする。教師が学生の居住区に出掛けけて指導することもある。

## D. 北京大学（4月4日午前）

北京大学の正門を入り、未名湖のほとりにある事務棲に通された。ここは、かつてスチュアートが燕京大学の学長として住んでいたところだそうで、<sup>1)</sup> 30人分位の椅子の用意された会議室には、すでに歴史、経済、法律の教師が4名、他に革命委員会幹部と責任者の一人（周先生）が居り、私達を出迎えてくれた。

### 〔概況〕—— 周先生の話

北京大学は1898年の創立で、現在20学部、83専門学科に分かれている。教師2,700名（うち外人教師は10数名で2名が日本人）、学生7,000名（35カ国200名の留学生を含む。日本からは16名）である。

革命的伝統のある大学で、毛主席は1918年と1920年に北京大学でマルクス、エンゲルス、レーニンの研究に力を入れ、1919年の五・四運動の発祥地ともいえる。

1969年末より教育革命が始まり次のような制度改革が行なわれた。

①募集制度 プロ文革以前は、中学の卒業生の中から試験により募集していたが、プロ文革以後は、実践のある労農兵の中からの推薦になった。中学卒業生は、2年間の実践を要求されるようになった。

②教育方法 理論と実践との結びつきを強め、3大革命（階級闘争、生産闘争、科学実験闘争の3大革命）との結合を図っている。これらの実践、闘争を通じて、学生たちは分析力、問題解決能力を養ない、人民に奉仕する人材となっていく。

北京大学には、校内に7工場、校外に85の連携工場があり、そこでの実習を通して、教育・科学・生産を結合させる方法をとっている。文科系の学生にとっては、社会全体が一つの工場であり、たとえば法律学部の学生は、具体的な犯罪を通して学んでいる。1年の1/3は社会に出て調査研究を行っており、いまや開門弁学の方向の正しさが実証されている。

③年限短縮 かつて文科系は5年、理科系は6年であったが、現在では3年ないし4年に短縮した。4年の例としては、歴史学部では世界史と考古学、外国语学部ではアラビア語、理学部の理論物理などがある。どこまで短縮すれば一番よいかは、まだ定まっていない。

④教師 できるだけ多種多様な教育方法を用いて社会主義へ奉仕する人物をつくることを心がけている。

⑤短期訓練班 7,000人の正規の学生以外に、人民公社の社員などが4カ月間、大学に来て勉強して行く。たとえば、北京ダックの短期研究班などはアヒルの生産をしている人民公社から来た社員を中心である。また大学へ来れない人に対しては、通信教育、ラジオ講座の企画を行っており、北京市内のフランス語のラジオ講座は外国语学部フランス語学科の企画である。また7・21工人大学等への積極的協力も行っている。

#### ⑥4人組による破壊

4人組によって我国の教育方針は大きな破壊を被った。4人組の手下は北京大学の地位と影響力を利用しようとして、学内にも魔手をのばし、プロ文革の性質をかえ、党のっとりを企てた。1973年末、4人組は北京大学と清華大学に於て梁湖というペンネームを使い書籍、新聞、文書を発表し奪権の顧問の役割を果たした。現在、学生・教師たちは深く堀り下げて彼等を批判している。華国鋒の指示に従い、正反両面に於ける経験を総括し、教育革命を更に深く堀り下げようとしている。

#### 〔図書館見学〕

大・中・小の閲覧室が36カ所あり、2,400名を収容できる。蔵書数は310万冊、うち80万冊が外文である。

玄関前には高さ7.8mはあると思われる毛沢東の大石像があり、未名湖のほとりの「為人民服务」の大看板とともに、大学は何のためにあるかを象徴している。この玄関を入ってすぐ右手に、参考閲覧室があり、そこには、第一部門（古代の書物）、第二部門（プロ文革以後の毛主席の著作）、第三部門（貴重本）が展示してあった。

見学した第一文科閲覧室では、教師と学生が同じ部屋で勉強しているように見えたが、服装は、教師も学生もさほど変わらないから真偽のほどはさだかでない。（各学部の講義室、研究室までは見学できなかったが、75年の夏まで北京大学の客員教授であった香坂順一氏は、研究室制度は74年に廃止されたと言っている<sup>2)</sup>から私の予測はあたっているだろう。）

#### 〔質疑応答〕

①「入試方法の実態、学力差などがあるのかどうか？」  
——中学の卒業生は、工場、農村、軍隊などに2年

間行く。学生は、40%は工場（地方も含む）から、40%は人民公社から、10%は解放軍から、10%はその他（商店、公務員等）から募集される。

教育革命初期には学力格差があった。古参労働者は文化・教養をうける権利を奪われていたため、彼らの教養は低い。

学力は絶対的条件ではない。実践の中で学んだ知識は広く役に立つ。1973年に入学条件を、政治思想の自覚とともに大学での履習に必要な一定程度の文化教養のレベルということに定めたが、これを四人組は破壊した。1973年8月の、いわゆる張鉄生の白紙答案事件で、教養のレベルを考察する制度を破壊した。政治教養においても一般教養においても一定程度のレベルが必要である。

#### ②「今後、入試方法の改革はないのか？」

——現在、一部分の学生は高級中学から直接採用することを検討中であるが、その場合も思想教育のしっかりしている学生というのが前提であり、プロ文革前の知育第一の道を再び歩むことはありえない。

#### ③「北京大学の管理・運営について。」

——北京大学には、北京大学革命委員会があり、これが大学の管理機構であり、党の指導の下に、中央の政策、方針、路線を実行している。

政治部、教育革命部、校務部、革命委員会弁司処とからなり、政治部は、政治思想の徹底が任務であり、人事関係もここが扱い、教育革命部は、教育・科学研究・生産労働を管理し、校務部は行政と総務に分かれ、財政、植樹などを扱っている。革命委員会弁司処には、革命委員会の主任、副主任がつめており各部との連絡にあたっている。

大学にはその他、共青委員会、学生会、家族委員会があり、これらも党委員会の指導の下にある。工会（労働組合）はない。

#### ④「教師の下放はどのように行われているのか？」

——北京大学に属する5・7幹部学校があり、教師もそこで労働に参加している。スペイン語学科の老教授などは、かつて労農を蔑視していたが、農村へ行ってから思想がかわってきた。

#### ⑤「教授と小中の先生の賃金拡差はどうなっているのか？」

——学校につとめるものの賃金は複雑な問題である。現在、解放前の教授もまだ残っており、彼らは高い賃金を受けている。賃金は12クラス、最高と最低は6～7倍の拡差があり、平均賃金は70元である（最高は一級教授の345元、最低は12級教授の56元）。教授はみな50歳以上で、割に高い賃金をもらう教授は400名くらいで、プロ文革以後、そういう古参教授を除いて「教師」として呼称も統一された。

#### ⑥「学問の自由はあるのかどうか？」

——毛主席の言葉が我々の社会主义建設の指導理念であるが、マルクス・レーニン主義を信ずるかどうかは個人のことであって、信教の自由も憲法によって保障されている。

政治原則と学術とは区別されなければならない。百花齊放、それも階級闘争の現実の反映であり、学術に於ては自由な意見はとくに許されるのである。知識人の隊列の中には、ブルジョアジーの意識をもっているのも少なくなく、たとえば哲学科の教授で唯心論の立場をいまだに堅持している教授もいる。

### おわりに

中華人民共和国への旅行は、よほどの有名人でない限り、集団としての招待旅行という形態をとる。各訪問地での見学コースは、出発前まで全く見当がつかない。もちろん希望は各人が提出しているが、団としての調整をした希望を提出しておかなければ、各人の希望はそのまま実現をみることの方が少ないと予想される。従って事前準備（これにも限界があるが）としての下調べが充分にできない。

各訪問地につくとその土地での見学コースが決定されるが、私達の今回の旅行中に見学した工場、人民公社、学校の中で、要覧、パンフレットなどが作製されていたのは北京の歴史革命博物館のみで、ここに述べた各学校についての紹介はすべて私ないし他の団員によるメモをもとにしたものである。要覧やパンフレットがあれば、紹介がどんなに正確になり、質疑応答が深まることだろう、と何度も考えさせられたが、これも、中国における社会主义建設、そして教育革命が一つの“実験”である以上、やむをえないことであろう。

斎藤秋男先生が、“教育実験としての文化大革命”と規定している<sup>3)</sup>ように、中国における教育改革はまさに実験中であり進行中だというのが実感であり、現に、各学校の革命委員会の主任の方々から口にされた言葉もこのことであった。従って、国家ないし県レベルでの統一的な教育法の体系はないし、各学校にも固定的な校務分掌、教育課程等は、今のところないようである。従って、学校関係の要覧、パンフレット等いっさい手に入れることができなかったという次第である。

プロ文革の中で、社会主义社会における新しい管理運営の形態として注目された三結合は、工場においても、人民公社においても、そして学校においても革命委員会として結実し、制度化されてきていることを確認できた。私はすべての学校において、学校革命委員会の構成を明らかにするよう質問したが、石家庄市拥軍小学校と北京大学でその概要を明らかにするこ

とが出来ただけであった。

市川博氏は、北京第二三中学の革命委員会の構成を委員43名、常務委員13名でその内訳は、幹部代表2名（校長、党支部書記、教務委員、政治主任から選出）、革命的大衆の代表10名（教員2、労働者1、紅衛兵7）、軍隊の代表2名（学校に派遣されている軍政訓練団から選出）と詳細に紹介している<sup>4)</sup>が、このあたり各学校でもう少しつっこんで聞きたかったところである。とくに鄭州第9中学では学生も参加しているということであったのだが、紅衛兵という形でなのかどうか、すべての議題に参加するのかどうかなど不明のままに終ってしまった。

教育と生産労働との結合については、鄭州市金水区実験幼稚園の学工科の実践に興味をおぼえた。カバンの留め金に皮のおおいを通すだけという単純な作業ではあるが、“はめ込む”という遊び的要素と、1つ2つなら遊びであるものが、無数の課題があるために根気を必要とする労働になっていることがうまく組み合わされているように思った。いくつ、または何分間あの作業をやっているのか、競争があるのかどうか聞きたいところであった。

石家庄市拥軍小学校の印刷工場では、かなり危険な用紙の裁断作業も生徒たちがやっていた。裁断機のハンドルを握っていた男生徒の慎重な顔つきを忘れないが、事故の心配はないのかとも感じた。悪ふざけをする雰囲気はいっさいなかったが、そのような労働規律の教育もきちんと行われているということなのだろうか。鄭州第9中学での試剤工場の見学などともあわせて感じたことは、“労働”的時間と教科の学習内容との関連を聞いてくるべきであったということである。工場には兼職教師もいるのだから、そのような人たちからの理論的な教授もなされるであろうが。

さて最後に、德育というよりも政治教育の占める位置の大きさに触れねばならない。

中国の教育は、1958年9月の中共中央及び国务院の連名による「教育工作に関する指示」<sup>5)</sup>にみられるように“プロレタリア階級の政治のために服務する”ものであり、“かならず黨の指導によらなければならない”ものとされている。したがって、知育と訓育、德育を分ち、公教育は知育のみを専らとすべきであるというコンドルセ的な公教育觀に立って、中国の教育を見る場合、中国の教育は、訓育過剰の天皇制教育と同じように目に映るかもしれない。

しかし、中国の教育における德育の質と天皇制教育のそれとの懸隔の大きさを忘れてはならないだろう。天皇制教育の頭教的構造が偏狭なナショナリズムと人権の否定の上に成り立っていたのに対し、中国の教育は、被抑圧人民の国際的な連帯と労働者農民の解放を

めざした教育である。

斎藤秋男氏は、北京市西城区新華小学校の革命委員会主任が、その学校の教育方針を説明する中で、「身は教室にあるも、心は祖国をおもい、目は世界に放つ」子どもに育てたいという言葉を用いたことが、耳に残っていると述べている<sup>6)</sup>が、中国の教育はまさに、人間解放とインターナショナリズムを結びつけたところに成り立っている。そのことは、すべての学校、すべての訪問先での私達への熱烈な歓迎によって実感することができた。

訪中前に、『中国の教育を学ぶ会』の月例研究会でとりあげた論文の一つに、市川博「文化大革命と初・中等教育の改革」（アジア経済研究所報）がある。市川氏は、中国では主体的思考の育成が重視されているが、幼稚園や小学校での政治教育は、「思考の一一番柔軟な時に、児童の思考に一定の枠をはめ、思考力を硬化させてしまう恐れがある」とその危険性を指摘しており、私達も同じような疑問を感じていた。

鄭州市金水区実験幼稚園のところで述べたように「四人組殺せ」のリレー競技には度肝をぬかれた。中国における反対派ないし反革命への批判の形式のすぐれた点が、徹底的な思想闘争（武闘ではなく）にあるのであるとすれば、たとえ遊戯であるにせよ「殺せ」と子どもに叫ばせるのは首肯できない。子どもにそう叫ばせることによって、教師みずからが4人組の影響から脱していることの証左とするものであるのなら、子ど

もはまさにダシにすぎないだろう。

ところで、上海に入った日から4人組批判の漫画展で4人組批判の漫画をうんざりするほど見せられ、各工場、人民公社で4人組の「罪業」を聞き、幼稚園や小学校で4人組から解放された喜びの歌や踊りを見せられていると、「殺せ」という子どもの叫びの中に自然な「確信」のようなものを感じてしまったのも事実なのだ。これを前に「熱病」にかかったのだろうかと書いたが、この私自身の中に矛盾して存在している印象は、いまだに消え去らない。これは近代公教育と、その批判の上になりたっている社会主義公教育の双方に入れこなっている、しかも互いにあい入れることのないパラドックスではないかと、今は、考えている。

#### 〔注〕

- 1) 香坂順一『北京大学二年』（龍溪書舎）P. 216
- 2) 同 上 P.27
- 3) 斎藤秋男『世界教育史大系4 中国教育史』（講談社）P. 266
- 4) 市川博『現代教育科学』1976年2月号 “地域に根ざす教育” P. 118
- 5) 野上正“文化大革命の中の教育改革”『科学と労働を結ぶ教育改革』（朝日新聞社）P. 88
- 6) 斎藤秋男『子どもと民族の発見』（明治図書）P. 200